

昨日今日

秋本喜久子



昨日今日

秋本喜久子

著者略歴

昭和13年千葉県生まれ。32年県立船橋高校卒業後、33年より44年まで全日空で働く。43年結婚。48年慶応義塾大学文学部（通信教育課程）卒業。

昨日今日

昭和五十三年七月二十五日発行

一〇〇〇円

著者 秋本喜久子

発行者 石澤三郎

発行所 株式会社 栄光出版社

〒114 東京都品川区東品川一―三七一五

電話東京(四七二)二二三五

振替東京七一六二三五〇

印刷 江戸川印刷所

製本 田中製本印刷

目次

藏

前

.....5

雨

.....65

濁

流

.....99

昨日今日

.....157

昨日
今日

藏

前

その朝も私は七時半に家を出て、砂利道を十分程歩き、満員のバスに乗って国電の駅へ出た。勤め始めて一週間経っていた。高校時代には、もう三十分ばかり早く、その駅から下りの電車に乗って通っていたから、電車は立っている人がチラホラといった程度だった。が、上りの電車は、どうしても一台見送って心に勇気をためてからでないと乗り込めない程、乗車口まであふれていた。私が一台やりすごした電車に、同じバスに乗っていた青物市場の息子が、身体ごと電車にぶつかるとして乗り込んだ。私はその要領を見ていて、次の電車にやっと割り込んだ。ドアぎりぎりに押されながら約三十分浅草橋駅まで我慢した。駅を出て浅草方面へ二三区画を歩きながら、勤め先の店ののれんをくぐる時の緊張感を想像しては、家へ逃げ帰りたい誘惑にかられる。私はとっても人づきあいが悪くて、あまり馴れてない人々と挨拶するのが疲れるのだ。けれども、もう森山商店の前に着いてしまった。

私は間口の狭い文房具問屋の日除をくぐった。そこが私を採用してくれた店である。大学へ行

くべきか止すべきかなどといった際限のない葛藤の時期は過ぎてしまった。侮辱的な職業安定所通いの末、働かせて下さいという態度をとることを覚え、ソロバンもできず、これといった技術のない自分を何とか売りこんで、やっと私はいくらか安堵したのであった。

ところがこの一週間、私は何となくさんの予期しなかった試練をくぐらなければならなかったことだろう。第一目に八時半に出勤すると、面接の時に出てきた中年の肥った女が、番頭だの小僧だの店員だのを紹介してくれた。が私には彼女が紹介してくれなかった彼女自身と中年の男が何者なのかさっぱりわからず、どう口をきいたものか皆目見当がつかなかった。紹介が終ると幸子という私と同年輩の店員が何くれとなく私を指図するので、すぐその真似を始めたが、番頭に向かって「松山さん、あのさあ」とか小僧に向かって「裕ちゃん、チョイとオ、あんだ今日寝不足じゃない、眼がはれてるよオ」などと、いかにも荒っぽい口調で話しかけるのを素直に真似しきれず、まず頭を悩ます問題だった。

それに、私は「いらっしやいまし」とはどうしても云えない。店に來た誰彼を見て、努力して出ることはどうしても「いらっしやいませ」である。けれども云ってしまった後でどうしても店の雰囲気になんとも合わずに空白が生まれるのを感じた。やっぱりしと云うべきか。でもそんな下町風のことばなんて。

店にはあがりかまちの端に事務机が置いてあって小柄な女事務員がいるが、朝の混雑時には店に下りて松山や裕三や幸子と同じように、「いらっしやいまし」と軽やかに挨拶してはてきばきと

客の云う品物を揃えている。得体の知れない中年男も遅いなりに店で客の相手をしているが、店の者たちは邪魔扱いもせず仕事をさせている。私は客に云われた品物のありがたがわからなくて、その男が近くにいた時にたずねようとするが、何と呼びかけていいかわからない。

店の奥には大旦那さん、大奥さんと呼ばれる老夫婦がいて時々店へ出てきてはおだやかに幸子達と歓談する。そのうち誰かの口から例の中年女を若奥さんと呼ぶ声が出たのでわかったが、そうした呼び名を教えてもらわない限り誰が主人で誰が使用人なのかわからないほど、店の者たちは好き勝手にふるまっている。特に幸子の活躍ぶりはひどいと云いたいくらいで、まるで我が家のように誰ともめちゃくちな会話を交す。そして家中荒々しい足どりで力まかせにたくさんの品物を持ち運びする。

奥には弥生という女中がいるが、この若い女もまるで若奥さんと友だちのような口をきく。私は当面どう振舞ったらいのか。私は大弱りなのだ。

さあ入ろう、と自分にかける声をかけて私は店の奥へ入った。いつものように得体の知れない男があがりかまちで足をなげだし、手帳を束ねていた。私は階段の下で上っぱりに着換えてハタキを持って店へ出た。そこへ幸子が弾丸のように飛び込んできて、じきに上っぱりに着換えてきて、私の先に立ち、日除の下へハチマキや運動帽を吊るし始めた。私も負けずに敷居の外側へ木箱を積んで毛筆の箱を運びだしたりし始めた。そうしているうちに、高校時代には葱の種を庭へ乾す作業さえ厭って勉強していた自分と思ひ比べられて、有無も云わずそうした仕事をする自分

が不憫に思えてきた。一瞬悲しさがこみあげてくるのを咳ばらいで散らして、小売商が買い込んで行きそうな品物を、店の奥の階段をかけ上がった所の倉庫へ取りに行った。

それが済んで溜息をつこうかと思っているところへ幸子がハタキを忙がしげに動かして、私にもそうしろとばかりにやけに近づいてきた。私が気づかずにいると、私の腕をつついて敷居の外
の筆箱まで連れて行った。

「若旦那、やっぱり奥と一緒にいられないのね」

とめくばせをした。私がげんな顔をする、

「お嬢さんじゃない、あのことばつき」

と云う。

「足袋の底が真っ黒だったわ。若奥さんも全く気のつかない人だから……」

そこへ濃いサングラスをかけた長身の男がのっそり入ってきた。オートバイから降りたその男は幸子に気軽に声をかけて店の中へ入って行った。美男子だ。皮のジャンパーが似合う、白い手袋が印象的だ。都会の男たちの様子を知らない私にはひどくモダンに見えた。私はどうしてだかわからないが身体中の神経がかたくなるのを感じた。私は高校でも、同じクラスの男子と挨拶や話ができなかった。するべきだと思ふのだが、他の女生徒たちがあまりにも恥ずかしがって近寄らないので私もそうした女生徒たちの方法に従っていた。中には勉強中の議論の続きをしたかったり、生徒会室で話し終らなかつた『子供は放任主義がいいかどうか』について個人的に話した

い男子もいた。けれども一步教室や生徒会室を出ると習慣上どうしても話しかけることができず、長いこと悔んでしまふのだった。

そのセンスで行けば、長身のサングラスのこの男は、個人的にはそうした話せない男の部類に入る位若いようである。そして私はまだ客が来てもいらっしやいましてということばと一緒に腰を曲げることができなかった。でもやらなければいけない。

私はしばらく外でハタキをかけていたが、最後のチャンス逃がしてはまずいと思い、まるでその時気づいたようなふりをして入って行き、腰を深く曲げてから、いらっしやいませと云った。

するとその男はおもむろにサングラスを外して若旦那という男にやりと笑ってみせた。近くで見ると、その男の肌は若旦那に比べてうるおいがあり、頬もこけてなく、鼻の高さも眼の大きさもまるで西洋の騎士のようで、その整い方がひととおりではなかった。私は眼の前がくらんと立っていられないのではないかと思った。

「そうじゃないのよ」

と、私は幸子にこずかれて店をぐるりと廻って奥の通路へ連れて行かれた。

「K鉛筆の石崎さんよ。こっちがお客様なのよ」

なるほど。鉛筆の製造会社のセールスマンなのだ。

その時若奥さんが私を呼んだ。

「須磨ちゃん、これと同じ画板二ダース頼んでちょうだい」

私はまた緊張した。幸子が飛んできて電話帳をくって画板屋の番号を指し示してくれた。私は全神経を使ってダイヤルを廻した。声が出なかったらどうしよう、受話器を耳に当てれば何とか話ができるだろうな、美男子のいる前でへまなんかしたらどうしよう。

だが実際に私の電話のかけつぶりを検分しようとする者は石崎などではなかった。大旦那も大奥さんまでも出てきた。小僧の裕三も、弥生までも台所から顔を出した。もちろん番頭の松山はかみあわせの悪い歯を左右に動かしながら手帳なんか開けている。事務機の輝子は算盤を入れてはいるものの、とつくに手を止めてしまった。私は脳天から出たような声で画板を注文した。

「まーあ上手だったわ」

と若奥さんはおおげさにほめた。みんなも安心したようにくつろぎだした。弥生も台所へ戻って行った。

私も一応何くわぬ顔をしてクレヨンや下敷を補充する作業を始めた。どうだい、これまで一度も電話をかけたことがないなんてことは誰にもばれはしなかっただろう、と自らをなぐさめてみた。が、こんな侮辱的なことってあるかい、聞いてあきれるじゃないか、これが優等賞をもらったり、外交官になってやるぞと意気込んだりした塩田須磨子のなれの涯かい、なんぞとしこたま胸に湧き上がってきた。石崎とかいう美男子をちらりと見たただけであがってしまったたり、電話が

初めてだの、いらっしやいまして云えないのだの、枝葉末節だけが問題となり、それに自分自身も翻弄されるなどとクラスメートや先生などが知ったら、塩田さんらしくないと、こてんこてんにやつつけられるだろう。けれどもとにかくそうしたことが問題で、それに気を配らなければならぬ事態に自分で選んだのだ。自分で選んだのだ。

勤めに出ることによって家族のいやがらせや嫉妬からぬけ出られたとほっとした私には、こんなつまらぬ悩みが待っていた。

2

自転車に乗って蔵前橋を渡ると、やっと交通量が減った。幸子は私の前に自転車を乗りだして額の汗をぬぐった。

「店員がたりないって云いながら全然ふやさなかったのよ。でも今年はやっと、それも神田橋の職安に頼んだのよ。それなら安上がりだからさ。あの時五人来たでしょう。あんなかであんたが一番肥っていて田舎っぺだったじゃないよう」

幸子は私が森山商店へ面接に行った日のことをもちだして笑いこけた。

「だけどあたし事務って云われたよ」

「そう云わなきゃ今どき高卒の娘が来てくれるわけじゃない。でももしかしたら輝子ちゃんのこと

と止めさしたいのかも知らないね」

震災記念堂を脇から入ると小砂利の道で、両側の銀杏の並木が芽をふいて、午前の空気は澄み渡っていた。タイヤがスリップしないようにぎこちなく梶をとりながら進むと、右手に水のない池や小さな石橋の僅かな荒れた庭園があり、正面の広い庭へと続いていた。本堂は典型的な神社風の建物、その左手奥にこれも縁錆の出た三重の塔があつて、囲りにはこんもりと木々が茂っている。近代的な隙のないビルディングと違って、これらは私をやつと安心させてくれた。鳩が群をなして餌をつついてゐる。

「あたし、いつも上野まで自転車で行くのよ。ここへ来てから随分と場所を覚えた」
私の先に走って近くの文房具屋へ案内する幸子も、安心したような声を出す。

「上野って！」

私には上野は非常に遠い所と思えた。自分の家からの感覚で測っていた。

「蔵前一丁目の交叉点を三輪橋行きの都電みたいに三筋町の方へ曲がつて行くのよ」

子供を連れた女中風の女が二、三人、花壇の囲りの石に腰かけてゐる。私たちが通ると女たちの前で小砂利をほじくっていた鳩が数羽舞い上がった。女たちはまぶし気に私たちを見上げたり、のんびりと話し込んだりしてゐる。

「女の娘が自転車で配達に行くの、このあたりの問屋ではうちだけよ」

と幸子は半ば憤慨しながらも、得意そうに云った。そのことばのぞんざいな抑揚。利かん気の